



記事作りの計画はスタートからゴールまで

連載記事を二回連続で休むということは、大変なピンチです。執筆側がどんな言い訳をしても、月刊誌で二つ間を空けて三か月目に出てきても、読者の興味は半減の半減になってしまいます。

本屋で売られている雑誌であろうとミニコミ誌であろうと、今ここで取り上げている団の広報誌であろうと、文字となり紙に印刷されたものは、生きています。鮮度が大切です。時間が過ぎたものに、魅力は感じられません。

連載は先の先まで

連載記事を書くということは大変なことなのです。一回目の原稿には力が入るものなのですが、回を重ねるごとにパワーダウンしていくというところは、よくある話です。計画性に乏しく、内容の薄いものを連載しようとしても続くわけがありません。俗に言う「三号企画」。連載だあと鼻息荒くスタートしても、三号目あた

りで息切れしてしまう企画です。編集人としては、大変恥ずかしい事態です。「ろくに文章も書けないくせに【連載】なんていきがっちゃって…」と、白い目で見られます。

連載は先の先まで原稿を用意するのは当たり前です。スタートの時点ではどの程度続けるのか見通しがつかないわけですが、最初から二〇回とか一〇〇回なんて計画が成立するわけがないのですから、三回とか四回とか、六回ぐらいの計画は立てておくべきです。というか、準備の段階で、スタートからゴールまでを見

極め、それを回数で割るぐらいの感覚が必要です。「最終回の構想がまとまったら、連載を始める」これです。時々いるんですよ「〇〇〇について、五回ぐらい連載で書きたいんだけど…」こういうことをおっしゃる方の九〇％は、毎月書きたいなあと思っただけで、次回、次々回の計画などありません。いきなり、「最終回はどうまとめるのですか?」と

尋ねるのも変な話ですが、それくらい気構えていてちよūdよいのです。編集人は、どんなに強烈な個性の持ち主と対峙して、例え押されたとしても、今号の誌面、次号、次々号の計画、全体的な編集方針を頭にに入れて打ち合わせてください。

たかが団の広報じゃないか、などと軽く考えないでください。クオリティを守るのは、自分しかないのだと思っで頑張ってください。

取材のシナリオ

取材をして記事を書くという作業は、広報誌作りにおいて、大切な要素の一つです。同じ団のスカウトたちや指導者、あるいは保護者から話を聞く、感想を言うってもらうという場合は比較的気が楽なのですが、まったく知らない人に会って、初対面その日のごく限られた時間に、いきなり話の本題に入って要点をもなく聞き出すなどという技は、常人では困難かもしれません。

編集人にとって、この難度C以上の技を身につけることは必要不可欠です。取材する相手の情報を事前に調べておくとか、質問事項をまとめておくというのは常識です。

この人からどんな話を聞いて、この問題とこの問題に答えてもらうって、最後はこんな風に気の利いたセリフでまとめてもらおう。レイアウトはこうしよう…と、全体の流れを完璧なシナリオとして持つておいてください。このシナリオを初めから頭に置けるか置けないかで、本物の編集人となれるかどうかが決まります。一通り話を聞いてきてから、さてどうやってまとめようかな、と考え出すようでは、残念ながら敗北は決定的です。

それから、テープに頼るのもよくありません。録音しておいて後から聞いてまとめようなどと考えても、時間ばかりかかって、よい記事はできません。録音しておけば、いろいろの意味で確認できますし、取材の



強い味方になることは間違いありませんが、あくまで相手と接しているその時間こそが真剣勝負。目を見開き、耳をそばだて、これがポイントだという言葉をつかまえてください。大事な言葉は、一番印象深くあなたの心に届くはずですよ。

あなた自身でそれらの言葉をつないでいく作業が、記事作りとなっていくのです。言うまでもありませんが、取材相手が話した順番と、読者が読みたい順番は、同じではありません。どこをどう組み立てて伝えていけば、興味を持って読んでもらえるのか。そのあたりは、編集人としてのあなたの腕の見せどころとなるでしょう。

ベスト5の五番目？

取材をする、人から話を聞き出すといったときに憶えておいてほしいのが、この法則。人は一番しゃべりたいことをしゃべるのではないという事です。まして初対面の人に、いきなり本音話す人はいないでしょう。「いかがですか？」と尋ねれば、

五番目くらいに言いたいことから、様子を見ながら話しはじめのものです。そしてインタビューをしてくる記者の反応をさぐりながら、この人物(取材をしているあなた)にどこまで話そうかと考えるわけです。

聞き上手な人というのは、ここで相手をうまくノセて、四番目、三番目：そして一番しゃべりたかった本音を引き出すことができるのです。会話をしながらズルズルズルと、相手がしゃべりたがっていることを引き出せるようになれば、◎です。

会話がとぎれたり、ピントのはずれた質問をしてしまっておかしな「間」ができてしまうようでは、おもしろい記事にはならないでしょう。

ベテラン記者になると、相手が話した言葉だけでなく、話さなかった言葉を心で聞く、なんてこともあるようです。それは、いい加減に取材して適当な記事を書くということではありません。相手の仕草や表情から、心に伝わってくるものを記事にするということでしょうか。

(つづく)